



「とき」

お寒いなかお集りいただきましてありがとうございます。今日は暮れのお経に伺っている僧侶もおりまして、普段は私を含め十人いる半分の人数でお経を勤めさせていただきました。気づいた方もいらっしゃるでしょうか、今日のお供え物はお寺の前庭になつている柚子の実です。今朝収穫したのですが、こんなにも鮮やかな色をしていたのかと眺めておりました。明日は冬至ですが、昔から冬至には柚子湯でしもやけやあかぎれを癒したり、小豆のお粥をいただいて邪気を除くとする風習が伝えられています。

立春、春分、秋分など一年を二十四の季節に分けた二十四節気のなかで、私はこの「冬至」が一番気になるんです。冬至というのは一年の中で一番昼の長さが短くて、夜が一番長い日ですから、翌日からは昼が少しずつ長くなります。つまり、冬至は冬の底のようなもので春への出発点。もう少し頑張れば春が近づいてくるように思えることが私にはうれしいのかなと思います。

自然のサイクルと重なる百日の荒行

常圓寺では三十年ほど前から、将来、中山法華経寺の荒行に入ろうという気持ちのある若い僧侶が11月1日からの百日間、朝

の6時に水行をしています。今朝も水行肝文を唱える元気な声が聞こえました。

私はこの荒行も冬至と深いかわりがあるのではと想像しています。ちょうど今日12月20日あたりが11月1日から数えて五十日目。百日間の真ん中にあたります。水をかぶり始める11月1日頃の朝6時は結構明るいのですが、今日は真つ暗でした。でも明日を過ぎると、少しずつ少しずつ水をかぶる時間が明るくなってきます。

我々がお日様からいただくエネルギーの量は冬至まではだんだんだんだん少なくなり、冬至を過ぎるとだんだん増えていくわけです。今年は新型コロナウイルスのために荒行が中止になりましたが、行われていれば今ぐらいのところが肉体的にも精神的にも最もきつい時期ではないでしょうか。荒行に入る前に体が蓄えていたエネルギーはすべて使い果たされて空っぽ。その肉体的な飢えというのは百日間続いていくのでしようが、一方で五十日間修行して養われてきた精神力は枯渇せずに冬至と重なる五十日を過ぎて強さを増していく、日照時間に導かれるようにたくましくなっていくのではと想像しています。

クリスマスと「冬至」

冬至の数日後にくるクリスマス。このクリスマスは北欧地方の冬至を祝うお祭りが原点といわれています。北欧の冬は長く、日照時間は限られています。それ故に太陽の光に対しての感謝の念は常夏の土地に暮らす人に比べてはるかに深いはずなんです。

「この一年、日が短くなるまで皆さんよく働きました。これからは温かい方に向かっていきますから、仕切り直してまた頑張っていくましよう」と。そんな思いが元々の

お祭りにこめられたのではないのでしょうか。

年末に思い出す朱子の言葉

話は変わりますが、中国では季節を色で表します。春には青をつけて「青春」、夏には朱をつけて「朱夏」、秋は「白秋」、そして冬は「玄冬」というそうです。玄には黒いという意味がありますから、冬は光が少なく暗いということなのでしょう。冬に黒という字が当てられていることで、青い春が引き立っているようにも思います。

中国に「朱子」という儒学者がいます。朱子学の創始者です。年末になるといつも思ひ出す朱子の句です。

少年老い易く学成り難し
一寸の光陰軽んずべからず
いまだ覚めず池塘春草の夢
階前の梧葉すでに秋声

「時はあつという間に過ぎ去っていくの

もしかしてコロナ？

一瀬靖子さん(91) 東京都小金井市

つるべ落としの暮れ方、けだるさに着のみ着のままベッドにもぐってしまつた。
恐る恐るみつめた体温計は38度を軽く超え、思い当たるふしはないはずなのに、追い払おうとしてもコロナの3文字がまといつく。

近くに住む娘からの安否確認電話の答えも、いつもの茶目っ気は消えうせ「ネツデタ」と低音でひとこと。あつと言う間に息子が勤務する遠方の病院に入院が決まつた。

次の日、大学生の外孫がハンドルをとり、娘の付き添いで出発。大好きな東北道もすずくまつたまま不安と緊張を乗せ北へとひた走る。

「あ！今日は今の私と同年で世を去つた母の命日、しかも仏滅！」。暗いかげをふり切り、「お母さん助けて」と気丈な明治の人だった母に祈る。

に、何かを成し遂げるということは容易いことではない。だからこそわずかの時間も無駄にしてはならない。春朗らかなときに池の淵でまどろむ夢見心地がまだ覚めない。でも庭の階段の前にある桐の木の葉を見るたびにすでに紅葉している。季節は秋、冬はもう目の前だ。拙い訳ですが、時というもののはあつという間に過ぎ去ってしまうものだから無駄にはいけないよ、そんな言葉です。

「もしかしてコロナ？」

先月のこの会で、産経新聞朝刊の一面に出ているエッセーから、卒寿を迎えた男性が86歳の奥さんを介護しているという話を紹介しました。毎度ですが今回は同じ欄に掲載されていた、小金井に住む91歳のおばあちゃんが書いた話を紹介したいと思ひます。(左枠参照)

雪を頂く日も近い山並みを望む院庭に到着。防護服の息子が目に入り、体の力が抜け、PCR検査、採血と点滴もありがたく「組上の魚」となつた。

どれ位の時が過ぎたろうか。「よかつたですね、コロナじゃなくて」。天使の晴れやかな声。車いすは飛ぶように病室に向かい尿路感染症と診断され深い眠りに入る。

翌晩、息子が花火を見ようと誘いにきた。院庭でのコロナ撲滅祈願花火だ。夜空中に弾け散る花々のエネルギーが美しい、轟き渡るひびきに、私は母の励ましをしっかりと感じとつた。点滴をお供に、還暦の息子に支えられて見た花火は90代のエールとなった。これからもまわりのすべてに感謝して生き抜きたい。私が元気なうちにコロナ禍がおさまりますように。

(産経新聞 昨年11月30日「朝晴れエッセー」より)



今、身につまされるお話ですよ。『熱が出ちゃった』『のどが痛い』『ひよっとしたら』、誰もがこういう心配の中に身を置いています。まして91歳。高齢の人ほど気を付けましようという事は耳が痛くなるほど言われていることで、よもやと暗い気持ちでベッドにいるのがよくわかります。

幸いこの方は恵まれた環境にあって、近くにいる娘さんから始終、安否確認の電話が来る。男の孫さんもうで車を運転してくれる。おまけに息子さんはお医者様ですから、救いの手がすつと伸びた。なおかつPCR検査も問題なかった。花火まで見せていただいて何よりであったわけですが、やはりそれでも「周りに感謝して頑張って生きていこう」「この災いが早くおさまりますように」とそんなことを思っています。感謝の中に最後までしっかりと生きるぞという気持ちを感じる文章です。

「とき」を正しく理解する

先月紹介した寺田寅彦さんの言葉を覚えていきますか？

モノを怖がらなすぎたり、怖がりすぎたりすぎるのは易しいが、

正当に怖がることはなかなか難しい

今の我々にとって大事な言葉だと思い、頭のどこかに置いて帰ってくださいとお願ひしました。

この寺田さんの言葉にある「モノ」を、先ほどの朱子の「一寸の光陰軽んずべからず」の教えで述べた「時間」に置き換えてみると、わかりやすいかもしれせん。

時間を怖がらなすぎたり、怖がりすぎたりすぎるのは易しいが、

正当に怖がることはなかなか難しい

たとえば「池塘春草の夢」。池の淵で気持ちよく夢見心地になっているのは、厳しい

言い方をすれば現実を見ていないということとです。時は刻一刻と過ぎていることを忘れてしまっている、要するに時を怖がっていない状態です。

そして「階前の梧葉すでに秋声」は、階段の前の桐の葉が色づいていて「ああ困った、気づいたら冬が来ちゃってる」とこれは逆に怖がりすぎている状態とも言えます。

当たり前すぎるのですが、一日24時間これだけは誰もが平等です。「〇〇さんはまじめだから1時間多い」「〇〇さんは不まじめだから1時間少ない」。それは絶対にありません。どんな人にも24時間、365日。これを本当に正しく理解できているかというと、理解できていないから時間を無駄にしてしまう。それが怖がらなすぎたりということとです。時間というものは怖いもの、平等であるが無駄に過ぎやすいもの、そういう風に受け止めることが大事ではないでしょうか。

時間についてはいろんな人が同じことを言っています。「時は金なり」もそうですし、日蓮聖人は「先ず臨終の事を習うて後に他事を習うべし」とおっしゃいました。『時というものは止まってしまうときがくることをよく弁えて大事に使ってください』ということとです。これは私が自分自身に一番言い聞かせていることであり、常に我々が心しなければならぬことだと思っています。

11月、12月とこうして無事に感話会を開かせていただくことができました。今年は本堂の工事に携わりましたが、順調に進んでおりますのも皆さんのおかげです。今年度中におおよその事業を完結させていきたいと思っておりますので引き続きのご協力をお願いいたします。

仏さまと草花

第1回 シキミ

年末、年始もたまに歩くようにしていましたが、紹介できるようなコースを歩く機会がありませんでした。そこで『万歩百景』のピンチヒッターに新しいコーナーを考えてみました。

仏教と蓮の花、法華経を唱える私たちと蓮の花は深く結ばれています。仏教的習慣やお経の中には他にも多くの草花が出てきます。この新コーナーではそんな草花にまつわる話を紹介します。参考図書は『なぜ仏像はハスの花の上に座っているのか』（稲垣栄洋著・幻冬社新書）です。

帳場で花を売るようになって一年強、二回目のお正月を迎えました。昨年は慣れずに正月らしい墓参用の花を用意することにまで気が回らなかった。今年はそんな反省も踏まえて松と南天を加えた仏花を仕入れました。

コロナの影響下ではありましたが立派なビル正面には昨年と変わりなく大きな竹の正月飾りを眺めることができました。お寺では門松という言葉のごとく山門、玄関と各所に松の枝を飾って正月を迎えています。門松、松飾りの歴史は古く、平安時代以前はサカキ（榊）やシキミ（柊）が飾られ、その後松に代わり、江戸時代以降に竹が使われるようになったそうです。

私の感覚ではサカキは神前に、シキミは墓前に供えるものですが、本来、年神さまを迎える

のが正月行事の主眼ですから神事にまつわるサカキが正月飾りの源流であるのは真つ当なことなのでしょう。

常圓寺ではシキミを販売していますが、シキミを墓前に供えると知る人は少なくなりました。花を備えるのが普通になったからです。同じようにお墓にシキミを植える方もいなくなりました。シキミは別名「仏前草」ともいわれ、古来より死者を悪霊から守る植物と言い伝えられてきました。事実、シキミはアニサチンという強い毒性物質を持っています。

火葬が習慣化する以前の土葬の時代では埋葬した亡骸を鳥や獣から守る必要がありました。そのために毒性をもつシキミが植えられたのです。また、常緑樹であるシキミは枯れにくくもあり、常に墓前を清々しく保つ上でも重宝だったのかもしれない。

時代が変わる中で習慣も変化していくのは止めようもありませんが、変わりゆくものの由来だけでも知っておくのは大切なことではないでしょうか。

